

「3. 11 以後の福島県の農業」

(有)コモンズ代表 ジャーナリスト

大江 正 章

どうも皆さん、こんばんは。大江といいます。

この中で福島県出身者の方、いらっしゃったら手をあげてください……。あ、どなたもいらっしゃらない。東北地方出身者の方……。お一人です。どこ出身ですか。

宮城県仙台市です。

大江 あなたに聞きますが、宮城県と福島県と、どちらが人口多いか知ってる？

宮城県。

大江 多分大体の人がそう思うでしょうし、正しいんですが、実は 1970 年代なかばまでは逆に、東北で一番人口が多いのは福島県でした。いま東北地方は仙台一極集中になっていて、宮城だけがどんどん人口が増えています。山形からも福島からも、休みの日にはバスに乗って仙台に買い物に行く。

この一極集中は東北だけでなく日本全体でも起こっていて、その結果、非常にいびつな状況になっています。たとえば日本の食糧自給率が 39% であることは皆さんご存じだと思いますが、東京都を考えてみると 1% しかない。大阪府や神奈川県も 2% です。つまり、大都市は食べ物やエネルギーを供給してくれる地方に支えられて成り立っている。依存して成り立っているという言葉を使ってもいいですね。そういう構造が日本ではいまどんどん進んできています。

この間の原発事故のことを思い出してください。原発事故を起こした電力会社はどこでしたか？ 福島県にあるあの原発は東北電力ではなく東京電力の原発で、福島県民にあそこから電気はただの 1 キロワットたりとも行ってない。みんな首都圏に行っていた。

きょうの話の結論みたいなことを最初に思わず言っただけなんですけれども、私たちは 3. 11 以降のこれからの復興ということを考えるときに、

これまでと同じようなあり方ではなく、都市と地方がいびつな関係にならないように、福島は福島として自立できるような、そして東京も少しでも自立を目指せるような、そういう社会のあり方を考えていかなくてはいけないと思っています。これがぼくの、いまの社会への基本的な考え方です。

きょうの主題の福島県は日本で 3 番目に面積の大きい都道府県です。1 番は北海道、2 番目は岩手県、その次が福島県ですが、福島県は東西に幅が広く、昔から三つの地域に分かれています。

一番東側の海岸寄りが浜通りと呼ばれる地域で、右側に太平洋がある。南のほうから行くと、ずいぶん前に合併したいわき市という巨大な市があり、いわき市の北側に双葉郡があって、そこが原発があったところです。その北に南相馬市、さらに相馬市がある。

浜通りの市町村の西側に阿武隈高地があって、それと奥羽山脈との間が中通りと呼ばれるところで、いわば福島県の真ん中です。ここには郡山市とか福島市があり、福島県の政治や経済の中心地になっています。

それよりさらに西側の奥羽山脈の西が会津と呼ばれているところで、テレビドラマなどで、皆さんも名前は聞いているでしょう。

この浜通りと会津とは気候も風土も全く違いますし、産業も違います。いまでも福島県は約 15 万人が県内外に避難を余儀なくされていますけれども、会津に避難した浜通りの人から、「雪下ろしが大変で住みづらい。こんなところで住みたくない」という声も聞こえます。浜通りは滅多に雪が降りません。東京と同じぐらいで、せいぜい年に数回です。会津は豪雪地帯で、2 メートルの雪はざら。同じ福島県でもこれぐらい違います。

会津の中心地には会津若松市や喜多方市があ

り、福島第一原発からは100キロぐらい離れています。さらに西会津や奥会津に行けば120～130キロ離れている。120～130キロといえば茨城の南部とたいして変わりません。

ちなみに、原発があったところは双葉町、大熊町のちょうど境ですが、このあたりは、いわき市とは大きく違って、小さな町と村が八つもあります。日本はこの間ずっと合併が進みました。最初は昭和30年ごろの「昭和の大合併」があり、その後、2000年前後の「平成の大合併」があったわけですが、双葉郡一帯は合併をしていません。財政が裕福だからです。なぜ財政が裕福かといえば、原発があるからです。原発があることによって、さまざまな交付金や補助金が下りてきて、立派な公共施設もたくさんあり、合併をする必要性もなかった。いいか悪いかは別問題ですが、事実としてはそういうところでした。

ももとは貧しい地域で、農業をやるにも広い農地がない。東京からの交通の便もよくないので企業誘致も難しい。そんなことが原発が来た一つの背景になっています。でも、たとえば岩手県の沿岸部を考えてみると、福島よりはもっと東京から遠くて、いわば不便です。しかし岩手県には原発が一つもない。これはなぜなのか、皆さん、ぜひ考えてみてください。その解答の一つはいままでの歴史の中にありますけれども、きょうはその話が主題ではないので置いておきます。

さて、この浜通り一帯はいま三つの地域に分かれています。レジュメに書いてありますが、一つは「帰還困難区域」です。小さくて申しわけないんですが、避難指示区域の概念図を見ていただきますと、フクイチ（福島第一原発）がある双葉町のほぼ全域、大熊町の6割ぐらいと、浪江町の大半が、放射線量が高過ぎて当分帰るのは難しい地域になっています。

二つ目の「居住制限区域」は年間積算放射線量が20ミリシーベルトを超える恐れがある地域です。そんなところに帰っていいんだろうかと私は非常に不安を覚えますが、国あるいは福島県の多くの自治体は除染を進めることによって住民の帰還をなるべく誘導しようと考えています。

さらにその外側に「避難指示解除準備区域」があります。ここは積算放射線量が20ミリシーベルト以下となることが確実であるとされている地

域です。「20ミリシーベルト以下」というのは非常に大ざっぱな基準で、それが1なのか5なのか18なのかによって全く一緒に扱うことは本来はできませんけれども、いまはそれが一緒にたにされています。

この地域は非常に複雑な様相を呈していて、「帰りたい。どうしてもふるさとで暮らしたい」と思う特に高齢者の方たちがたくさんいらっしゃる一方で、「帰っても仕事がなかなかないし、移住して別のところで暮らそう」と思っている若い人たちもたくさんいます。そして、その間で引き裂かれている人たちが一番多い。ふるさとへの思いは強くある、しかし現実を考えると難しい。どうしようか。そういう悩みの中で日々生きている人たちがたくさんいて、その人たちを生み出した全ての根源がもちろん原子力発電所にあるわけです。

次に福島県の農業についての基礎的な話をします。福島県の農業生産額は全国で11番目で、首都圏への野菜と果物の大供給地になっています。よく農業県というと、たとえば新潟はお米、北海道は畜産や酪農あるいは大豆やジャガイモなどの穀物が多いとか、それぞれの地域に特徴があるわけですが、福島県は全国でも珍しく農業のバランスがとれている地域です。農業生産額は全国11位ですけども、収穫量でトップというのは一つもない。2位がさやいんげん、桃3位がそば、きゅうり、梨。4位が水稻、こんにゃく、なめこ。このように、実にいろいろな農産物をつくっていることが分かります。

今回の原発事故によってさまざまな農産物が影響を受けました。なかでも、非常に大きな影響を受けた一つが果物です。福島市近郊には「フルーツロード」がありますが、もともと果樹栽培が盛んな地域で、梨、桃、さくらんぼ、りんごなど、さまざまな果物がつくられています。桃、りんご、さくらんぼの三つは高級品と位置づけられていますが、特に贈答用が多い桃とりんごは2011年の秋以降、壊滅的な影響を受けました。まだその販売額は一番盛んだったころの3分の1ぐらいでしょう。さくらんぼ生産のトップは山形県ですが、福島のほうが首都圏からの交通の便がよいので、6月の中旬ぐらいから観光農園にさくらんぼ狩りの人がたくさん来ました。ところがいまは

私は去年もことしも7月の初めに、半分支援でさくらんぼ農園にたくさん友だちを連れて行きましたけれども 残念ながら閑古鳥が鳴いているという状況です。

断っておきますが、昨年もことしも国の基準の100ベクレルを超えた果物はほとんどありません。国の基準よりも大幅に低い検出限界10とか20で検査しても「不検出」になる果物が大半を占めています。しかしながら、こと放射性セシウムに関して言えば、まず安全と考えてもいいということと、買われるということの間には、大きな差があるわけです。

このようなバランスがとれた農業で、産出額では11位だけれども、農家の数では福島県は全国で2番目です。ちなみに一番農家数が多い都道府県は北海道だと大半の人が思っておられますが、実はそうではなく、茨城県です。2番目に多いのが福島県で、3番目が北海道という順番です。これは何を意味しているかということ、福島県は小規模な農家、零細農業が多いということです。特に浜通りと中通りの間の阿武隈山系には小規模な自給的な農業が強く残っています。日本全国で言っても、このあたりと岩手県、そして中国地方の山間部が一番、自給的農家が多く残っているところです。飯舘村、川俣町、田村市や二本松市の一部、昔の自治体名で言うと常葉町や東和町などになります。

もう一つの特徴は、福島県は有機農業が盛んだということです。有機農業の大きな定義としては「農薬や化学肥料を全くないしほとんど使わずに農産物を生産する」農業です。福島県には「有機農業推進室」という、全国の都道府県レベルでたった一つだけの組織があります。前知事の佐藤栄佐久さんの奥さんが安全な農産物の共同購入運動を一生懸命やっていて、その奥さんの影響があったと言われてはいますが、有機農業行政に熱心です。ちなみに、彼は原発に対して懐疑的でした。

バランスがいい、小規模農家が多い、有機農業が盛ん、これが福島の農業の三つの大きな特徴と言っていいと思います。そして、浜通りから会津まで非常に広い県の中で「福島県有機農業ネットワーク」という有機農業者たちが集う組織が2009年に結成され、技術交流をしたり販路の開

拓をしたりしてきました。その福島県有機農業ネットワークが母体になって「オルガン堂」というお店を3.11後に世田谷区下北沢につくっています。正確には「コミュニティ&オーガニックカフェふくしまオルガン堂」という名前で、「オーガニック」は有機農業の有機ですが、人と人との間に有機的な顔の見える関係をつくり出している。このメッセージがこめられている。「コミュニティ」には、その場が福島から避難している人同士のコミュニティであり、その人たちと東京都民のコミュニケーションを結ぶ場であり、そして「食べる人・消費者」と「つくる人・農業者」のコミュニケーションをつくっていくという意味が込められています。

では福島の農産物がいまどうなっているかといえますと、3.11以降、「福島の農産物は危険だ。食べるな」という声がずいぶん出ました。ぼくは1980年代から原子力発電には懐疑的で、旧ソ連でチェルノブイリ原発の事故が起きた1986年ごろから反原発運動にかかわってきましたが、その反原発運動の仲間たちは一昨年か昨年にかけて、「福島の農産物は危ない。あんなところに住むのは間違っている」とか、人によっては「福島で農業をすること自体が殺人的行為だ」という言い方までです。私自身も3月11日からしばらくの間は「福島の、あるいは北関東の有機農業はもう終わりではないか」と思いました。

一方で、ぼくはフクイチから150キロぐらい離れた茨城県旧八郷町（現在は石岡市）に仲間と田んぼを借りて20年近くお米をつくっていて、お米はほとんど買ったことがありません。自給しているわけです。田んぼの仕事は大体3月の下旬から始まります。ちょうどあの原発事故の3週間後ぐらいが種まきの予定で、どうしようかと話し合いました。その結果、「われわれは素人ながら米を長くつくってきたのだから、ことしも種をまこう。耕そう」と決めて、通常よりも1週間遅れで種まきをしました。そして、その時点では放射性セシウムが検出されるのではないかなと思っていましたので、「9月の下旬に収穫して測ってみて、検出されたら東京電力に補償を求めよう」と考えました。同じようなことを福島の農業者も考えたんですね。

実際、3月下旬には福島の畑にあったほうれん

草や小松菜から1万ベクレルを超える放射性セシウムが検出され、やはりヤバイなというのが当時の状況でした。しかし、5月になってから土壌の専門家の人たちの話を聞くと、チェルノブイリの土壌と福島の土壌は大きく違うことが分かってきました。

この話をする前に、実際にその後、農産物から放射性セシウムがどのように検出されたのか、レジュメに沿ってお話したいと思います。

3月、4月は果樹や野菜で当時の放射性セシウムの暫定規制値1キログラム当たり500ベクレルを超えるものが多く、特に福島の5月は山菜の季節ですが、わらび、たららの芽、ぜんまいなどから1000ベクレルを超えるものも出ました。しかし、6月以降になるとセシウムの検出は減り、野菜ではおおむね検出されなくなりました。なす、きゅうり、トマトなどの夏野菜が出回る7月中旬から下旬には、当時検出限界20ベクレルぐらいで測っていたと思いますが、おおむね「不検出」でした。その数値が信じられないとか測り方が甘いのではないかといって、同じものを何度も測ったり機械を変えて測ったり、そんなこともしていました。

また、2011年の4月や5月のころ、福島県産のお米はほとんど売れませんでした。でも皆さん、考えてください。2011年の4月や5月にあったお米はいつ穫れたお米ですか。お米は9月~10月にできるんですよ。そのときあったのは、ごく一部は2009年の古米もあったかもしれませんが、ほぼ2010年産です。それがセシウムに汚染されていないとことはすぐ分かるのに、あつという間にみんな買わなくなりました。これぐらい、いま多くの消費者たちはさまざまな報道に惑わされている。米がいつ穫れるかも知らない人もいます。

本筋から少し外れた話になりましたが、2011年産の福島のお米を測ったところ、100ベクレルを超えたものは1%以下でした。ただし、500ベクレルという規制値は高いと私は思います。この結果を受けて福島知事は10月12日、「福島のお米は安全です」という記者会見をした。ところが、その記者会見の直後、500ベクレルを超える米が出て、これ以降、「福島のお米は危ない」という考え方が圧倒的に広がります。同時に「行政の言う

ことは信頼できない」という考え方も広まりました。

さらに、ある地点で500ベクレルを超えたという検査結果が出ると、テレビも新聞もそこに殺到します。実際二本松市のある地域で500ベクレルの米が9月下旬に出たとき、すごい勢いで押し寄せて、まるでその農家が悪人かのように、「どうしてそんなお米をつくったんですか」「なぜ出たんですか」と報道する。一方で、99%の500ベクレル以下の米については報道しない。そうした報道を見ていれば、普通の人々が「福島県のお米は危ない」と思うのは、ある意味当然です。この間のマスメディアの報道のあり方は、原発問題をきちんと伝えてこなかったという部分と農産物の状況について正確に伝えてこなかったという部分と、その両方において非常に大きな問題があったと思います。

そして1年経った2012年、さすがに福島県は前年を反省して、お米の全袋を検査するという、それまで世界中どこも誰もやったことのないことをします。米1袋はいま30キロです。30キロ袋を持つこと自体大変です。その重い袋を農業者たちはトラックに載せて農協に運び、検査機械に載せて1袋ずつ検査した。

その結果が資料1です。2012年産のお米を測ったところ、99.78%はそのときの測定下限値25ベクレル未満だった。25ベクレル以上だったものをさらに精度の高い検査をしたところ、新しい基準値の100ベクレルを超えたものは0.0007%だった。2013年産米については、9月上旬から収穫している早場米だけです。まだ1万3420袋しか測っていませんが、99.97%が25ベクレル以下、51ベクレル以上は0という結果になっています。

ここで大事なことは、放射性セシウムが多く出る田んぼは特定されていることです。山沿いであって、山から流れてくる水用水に使い、あまり手入れをしていない田んぼから多く検出されている。言ってみれば山に汚染がある。だから、山菜はまだ危険であっても、普通に管理された普通のお米はほとんど安全だということがはっきりしています。でも2012年産の福島のお米は売れないし、2013年産の販売状況はまだ分かりませんが、おそらく事態はあまり変わらないだろうと思っています。

野菜・果物に関しては資料2, 資料3でことしの検査結果を示していますが、さくらんぼのごく一部を除けば、全てが25ベクレル未満になっている。ここまで押さえ込むには農家がものすごく努力しています。セシウムは木の表面に降りましたから、りんごや桃の木の皮をはぎ取り、高圧洗浄機で大量に水をかける。そういう作業を寒い冬に一生懸命やった。農業者のそういう努力はマスメディアは伝えませんので、一般にはあまり知られていないのは残念です。

ほくも福島県有機農業ネットワークの会員の一人ですが、有機ネットで出す野菜も米も全て、検出限界3~4ベクレルで測っています。全量検査ではなくて抜き取り検査ですが、3~4ベクレル以上出たものは一切、有機農業の仲間はどこにも出荷をしていません。幸いなことに、2012年と2013年に関しては、われわれの仲間がつくったものは全て、安全と言ってよい。

ここで「安全」ということについて言及しておきます。あたりまえのことですが、農産物の安全性というのは決して放射性セシウムだけではない。農薬の問題、環境に及ぼす化学肥料の問題、海外で大量に使われている遺伝子組み換え技術の問題、さまざまな問題を農産物の安全性というときには考えなくてはいけません。しかしながら、いま「安全性」というと、ほとんどの人がなぜか放射能のことだけを考える。

福島県有機農業ネットワークの会員農家の多くは農薬をほとんど使っていませんから、本当の意味で安全です。ただし、日本の農産物全体がそういう観点に立ってどうかと考えると、実は大きな問題があります。世界的に見て、日本は残念ながら単位面積当たり農薬使用量が非常に多い国です。

もう一つ、これは皮肉な話ですが、放射性セシウムの安全性について言えば、日本中にいま流通している農産物で一番安全な農産物は福島県産です。なぜか。検査しているからです。ほかの県は市場に出す米や野菜や果物を福島県みたいにきちんと検査していません。汚染されたのは福島だけではなくて北関東もそうですし、カリウム40という放射性物質はもともと自然界にある。あるいは1950年代から60年代にたくさん行なわれていた原水爆実験によって降った放射性セシウ

ムが一番多いのは新潟県から西日本にかけての日本海側の地域だそうです。これは中国やソ連と近いこと、そして偏西風の関係がおそらく影響していると思います。そのように考えると、放射能の安全性も現在の放射性セシウムだけで考えることができないのですが、このこともいま多くの人が忘れていきます。

では、なぜ福島県の農産物はおおむね2011年の7月以降、放射性セシウムの検出が押さえ込まれたのかということ、それはさっきちょっと言った土壌の問題です。私は化学オンチなので、このへんは専門家の話を聞いて勉強したことですけれども、チェルノブイリの周辺はカリウム欠乏型土壌であるのに対して、福島県の土壌にはカリウムがたくさん含まれている。セシウムはカリウムと性質が似ているので、カリウムが豊富な福島県の土壌はセシウムを取り込む比率が少なかった。これは原発に対する立場を超えて自然科学者たちの共通の見解になっています。

もう一つは、降ったセシウムは農地の表面につくわけですが、その表面についたセシウムは耕されることによって土の下のほうへ移動したことも明らかになっています。農業をやっていないたとえば公園の土と畑や田んぼの土を比べると、畑や田んぼの土のほうが相対的に安全だということで、通学路の周囲や都市部の除染を一生懸命しなければならぬのはこのことから正しい。また、田んぼや畑には大量の土がありますから、セシウムが土に混じって吸収され、作物には移行せず、土に固定されていったことも明らかになっています。

こうしたことをより明確に物語る事実として、ぼくらの仲間が耕した結果を計測しました。二本松の東和地区の、空間放射線量が高い川俣町山木屋地区に比較的近いところで2011年の夏、草の上で空間放射線量を測ると、毎時1.5マイクロシーベルトというかなりの高さでした。そこを農業者が草を刈り、堆肥を入れ、特別の装置をつけたトラクターで土の下15センチまで深く耕して測ったところ、毎時0.7マイクロシーベルトと半分になりました。これは作物をつくってもいいのではないかと考え、夏の終わりに大根の種をまき、カリウム肥料を散布して、10月の初めに収穫して測定した結果、放射性セシウムが最も多

く出た大根で1キログラム当たり17ベクレルで、国の現在の基準のおよそ6分の1でした。

ということは、農家が耕すことによって、堆肥を入れることによって、放射性セシウムは相当程度押えることができる。2011年4月5月時点で、多くの農業者たちは非常に悩み、種をまかなかつた人たちもたくさんいたわけですが、実は種をまくことによって、営農を続けることによって、汚染が押えられてきた。これがこの間、農業研究者の調査によって分かってきたことです。

南相馬市はフクイチから一番近い旧小高町、原町市、そして鹿島町の三つが合併して2006年にできた市で、旧鹿島町はフクイチから30キロ以上離れています。その南相馬市では2011年、市長が中心になって「米をつくるな」という呼びかけをして、公式的には1アールたりともお米が作られませんでした。実は正確に言うと一人だけ、市長の通達を破って米をつくった85歳の老農がいましたが、その人もそのお米を食べることは許されなかった。市長は言ったそうです。「一切つくるな。その代わり、おれが責任を持つ」。

「おれが」というのは「おれが東電と話を付ける」という意味で、10アール当たり約5万9000円の補償金が出ました。この金額は結構高くて、普通の農業をやっている人にとってはお米をつくって売るより実入りがいいケースが大半でしたから、おカネのことだけ考えれば、南相馬市ではお米はつからないほうが得だった。2012年も同じことが続きました。補償金額は約5万7000円です。

ことし2013年、行政はさすがにまずいと思って、「ことしは米をつくらう」という提案を2012年12月にしましたが、2年続けてつくらなかったことによって多くの農業者はもう意欲を失っていて、田んぼは荒れ放題で、セイタカアワダチソウがいっぱい生えている。5万7000円ももらえるならいいやとなって、市がつくらうと言ったにもかかわらず、農業者たちがつけないと決めました。

ぼくはきのうも相馬市から南相馬市に行っていたのですが、仙台平野を南下して相馬市に入ると、あたり一面、稲穂がこうべを垂れている。もう刈っているところもありましたが、美しい日本の原風景が広がっています。ところが南相馬市に

入ると一転して、田んぼは荒れている。フクイチの周辺は放射線量がものすごく高いですからもちろん米はつくれません。そうでない地域でも米をつくらないという選択が行なわれているのです。多くの人の話を総合すると、もう4年目だし、周辺30キロ、40キロの他市町村はお米をつくっているわけですから、来年は補償金が出ないでしょう。農業者たちはどうするのか難しい状況になっています。

では、食べるほうの人たちはどう考え、どのように行動してきたのか。最初は「行政のいうことは信用できない」と言って買わなかった。いまの福島県の全量検査は、反原発の原子力専門家も含めて「おおむね信頼できる」という評価ですが、それでも福島のお米は買われない。

資料4に朝日新聞に昨年掲載されたデータを紹介しています。福島、宮城、茨城県の2011年度産米についての購買調査です。既婚女性1760人の回答によると、「セシウムが暫定基準以下でも買わない」人が首都圏5割、関西圏6割以上です。暫定基準は500ベクレルですから、そんなものは買わないというのはよく分かります。しかし、「セシウムが不検出でも買わない」が首都圏で3割、関西圏で4割。つまり、なんであろうが福島のもものは買わないという消費者がたくさんいるということで、これが一般的な状況です。

さらに、福島で盛んな有機農産物の購入者はどうしたか。有機農産物を買っている人は、普通の消費者に比べて安全性への関心が強く、農薬や化学肥料を使ってほしくないという人たちです。彼女たちが顔が見える関係のもとで有機農業者たちを支えたかといえは、残念ながらそうではなかった。

福島の二本松市で有機農業40年の71歳のベテラン農業者がいます。多くの人から尊敬と信頼を得ているその方に話を聞いたとき、「いや、提携で直接農産物を送っている人の6割が離れました。大江さん、若い人たちだけじゃないんですよ。年配の人も含めて、『さっさと、足早く離れた』」と彼は言っていました。これが象徴的な悲しい現実です。ぼくの田んぼがある茨城でも、有機農業の仲間たちは大体3割の提携消費者を2011年に失いました。例外はありますが、その人たちはおおむね戻ってきていません。

有機農業における提携というのは「つくる人と食べる人の間に親密な顔の見える関係をつくり出していく」というのがモットーです。実際に80年代半ばぐらいまでは、消費者が頻りに農家へ行ってお手伝いしました。当時、農薬を使わないで米をつくると雑草がたくさん生えて大変だったので、草取りに行ったし、収穫のお手伝いにも行ったのです。それを「援農・縁農」と呼んでいました。

そんな関係性は90年代以降だんだん薄れてきて、「あなたつくる人、私食べる人」になっていた。私はこれを「食農乖離」と呼んでいますけれども、食と農の間の距離が遠くなっていたので、「さっさと、足早く離れた」ということです。

自分が何らかの意味で畑や田んぼとかかわっていれば、感覚が違います。自分で種をまき、作物をつくれれば、それがいかにいとおいしか、いかに大切か、いかに大変なことか、体で分かります。体で分かった人は、そう簡単には離れません。

有機農業者の何人かは、小学生以下の子どもを持っている家庭に彼らのほうから電話をかけて、「ちょっと危ないと思うから、しばらく休んでください」と言いました。小さい子どもであればあるほど、放射能の影響が強いですから。そういうやさしい感性を持っているのが多くの有機農業者です。それに応えるだけのものを「私食べる人たち」は全くと言っていいほど持っていなかったわけです。

そして、いまどういふ状況か。たとえばスーパーに行きますと、福島のきゅうりとかトマトはそこそこ並ぶようになっています。特に首都圏のきゅうりは大半が福島県産でしたから多く並んでいます。他県産から比べると1割から15%程度安い。しかし、生産者たちの売り値はそんなものではありません。「あなたたち、補償金もらってるでしょう。うんと安くていいじゃないの」という言葉のもとに買い叩かれているのが現状ではないでしょうか。

お米は相変わらず、スーパーにはあまり並んでいません。ただ、有機ではない普通のお米は、安くですが買われてはいます。外食産業やコンビニに並ぶお弁当などに使われて、実は多くの人たちが福島の米を食べているわけです。

一番苦しんでいるのは有機農業者です。私の親

しい人で、フクイチからおよそ100キロの会津で7ヘクタール有機米をつくっている夫婦がいます。いままでは全部さばけて足りないぐらいでしたが、2011年のお米も12年のお米も残ってしまった。ぼくらも一生懸命販売のお手伝いをしましたが、なかなか難しい。

率直に言って、いま福島は非常に複雑な状況を示しています。大まかに言えば、行政は「危なくないから逃げるな。戻ってこい」と言い、反原発運動関係者は「危険だから逃げる」と言う。もちろん前者のほうが圧倒的に数が多いわけですが、その間で多くの農業者たちは悩んでいます。

フクイチの北側か南側か西側かによって違いますから一概には言えませんが、30キロ圏から70～80キロ圏の年間空間放射線量が1～2ミリシーベルトぐらいの地域の多くの農業者たちは「ある程度危険かもしれないけれども、移住するわけにはいかないし、移住したくない」と考えている。

ちなみに、反原発でぼくがとても尊敬している京大六人衆の一人、今中哲二さんの見解では「許容できる数値は年間1ミリシーベルトぐらいだ」ということです。その1～2ぐらいのところの農業者たちは、悩みながら、でも耕したいと思っています。実際にそこで栽培された農産物は、ほとんどと言っていいくらい、安全なものになっています。私は、多少危険性はあるかもしれないけれども、残って耕したいという仲間を支えています。これは圧倒的な少数派です。私が親しい脱原発・反原発の仲間から「おまえは放射能の危険性が分かっていない」と糾弾され、ぼくが共同代表をやっているNGOは、私のそういう立場のおかげで辞めた会員もいます。でも、私は自分の信念は曲げるわけにはいきません。

もう1時間経ってしまったので日本の基準値の再検討のところは飛ばして、ぼくが一番話しかかった注目すべき生産者たちの取り組みの例として、「ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会（二本松市東和地区）」について話します。

旧東和町は人口約7000人で、フクイチから50キロ程度のところ。阿武隈高地、行政の言葉で言うと中山間地で、平らなところがほとんどなく、自給的農家が多い。東和に限らず日本で一般的ですが、もともとは養蚕の一大産地です。シルクロードというのは日本の各地にあります。明

治時代以降、日本の輸出を支えてきたのは絹であり、絹の産地は豊かな地域でしたが、生糸の輸入自由化が1960年代以降始まり、時を同じくして木材の輸入自由化も始まる。

皆さん、「半農半漁」という言葉をご存じでしょう。日本の中山間地の大半は「半分農業、半分林業」で暮らしてきた。その林業というのは必ずしも木を伐るだけではなく、山に植えていないし生えている椎茸、きのこ、山菜なども含めてですが、そういう地域がだんだん農業で食べられなくなってきた。

この協議会のいまの理事長は59歳、前理事長は55歳ですが、彼らが高校を出た1970年代なかばは、農業を継ぐ人は非常に少なかった。農業に未来はないと農業者たち自身が思い、子どもたちには都会に出ると言った。寒いところですから、冬に露地で野菜はできません。冬の仕事がないので、出稼ぎに行くしかない。

1960年代以降、東北各県で出稼ぎが増えました。1960年前後はいろいろなことが変わるきっかけの年です。高度経済成長が始まり、1961年にはそれから三十数年間日本の農業を規定した農業基本法が制定されて、農林省は「選択的拡大」とうたい、機械化、化学化、専作化、大規模化が進んでいった。自給的農業はどんどんすたれていきます。そして出稼ぎ労働者たちが1964年、東京オリンピックの年にできた新幹線をつくり、高速道路をつくったわけです。

東京の人間の生活はそういうところでも東北の農業者たちに支えられてきたわけですが、そういう中で東和の若者たちは、なんとか自分たちが出稼ぎをしないで、地域に残って農業を主体として暮らしていける基盤をつくらうという模索を1980年前後から始めます。当時は青年団という組織が日本中にありましたので、青年団で夜っぴいて語り合う中で、「もう養蚕は難しいから、ミブラスアルファのアルファをなんとか考えていこう」といって、トマト、きゅうり、椎茸などの栽培を進めていきます。また、それらを農協を通して市場に出荷するだけではなく、自分たちで売り先も見つけ出していく。それが産直（産地直送）で、福島市や首都圏の生活協同組合と取引し、自分たちの農産物を相対的に高い価格で売る努力をしてきました。生協のニーズに対応して、なる

べく農業を使わないで野菜をつくる。さらに、養蚕はだめになったけれども、先祖からずっとつってきた桑の歴史を途絶えさせたくないと考え、桑の葉のパウダーや桑の実のジャムなど特産品の開発も始めます。

そして、2006年からは「道の駅」の運営を行政から受託して、国道に面していない交通の便のよくないところにあるにもかかわらず売上を伸ばし、事業高年間2億円にまで育て上げてきました。会員の平均年齢67歳で、高齢者が小規模の自給的農業を続けながら、一部の50代の専業農業者たちと手を取り合って頑張ってきた。そこが3.11で大打撃を受けそうになったわけです。でも、地域活動が盛んで、いろいろなところとのつながりがあるので、取引先やばくも所属している日本有機農業学会などが、この間ずっと支援してきました。

資料5に「3.11以後、数カ月の動き」を書いておきました。まずフクイチに隣接する浪江町から大挙して来た避難者を受け入れ、約1カ月後に生産者会議を開きます。4月19日には、福島県有機農業推進室が「作付けに関する考え方」を発表して、堆肥をたくさん入れてカリ肥料を散布すればやっていけるという方針を出します。それを受けて生産者会議で「耕して種をまこう。出荷制限されたら損害賠償を提起しよう」と決めて、みんなで営農を開始します。期せずして先ほど申し上げたばくたちと同じ行動をとったわけです。

6月以降は放射性セシウムの測定を開始する。それは、単に測って安全なものを消費者に出すためだけではありません。自分が野菜をつくって、それを孫に食べさせる、都会に出ていった子どもたちに送る。それが70代、80代のお年寄りにとって、かけがえのない心の拠り所であり、営みですから、それを保証するために自給的農家の少量の作物も全部測る。それによって、お年寄りたちも安心して営農を再開できるという考え方です。

しかし、現実はいかに美しいことばかりではありません。お年寄りが一生懸命つくった野菜を、お嫁さんが危ないと言って孫に食べさせないということも、たくさん起きました。あるいはお米を別々にたいて、お年寄りは地元の米を食べ、お嫁さんと孫は買って来た米を食べる。それまで米を買う経験はないわけですが、米も野菜も買っ

てきて食べるということが2011年や12年に起きました。

そうしたことが少しずつ解消され始めたのは、昨年の秋、あるいはことしに入ってからでしょう。ある有機農業者からも、「いや、実はうちも去年は息子も孫も、おれがつくった野菜を食べなかった。ことしになってやっと食べるようになってくれた」という話を聞きました。野菜は数ペクレル以下だったと思いますが、あれだけマスメディアが報道すると、そういうことが起きます。

それでも地道な取り組みを積み重ねていく中で、だんだん不安が解消されてくる。「暮らし、心の再建に向けた座談会」と書きましたが、それぞれの想いを吐き出して体験を語り合うことが非常に大事だと思っています。

現在もお年寄りたちは「小さな農業」を継続しています。専業農家は売上の減少に悩みながらも首都圏に出張販売を繰り返して、消費者に話をする中で野菜を売っていく努力を積み重ねてきました。先ほど話したオルガン堂はごく小さな販売をお手伝いするところにすぎませんけれども、ひとつの重要な場所です。

また、東和地区は新規就農者が多く、この十数年で約30名です。人口7000人で、もちろん全部が農家ではありませんから、その中で30名の新規就農者がいるというのは比率として非常に大きい。その受け入れ母体になってきたのが、かつての青年団の仲間を母体としてつくった「ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会」です。移住して農業をやりたいという人を農家が受け入れて、半年から1年間の農業研修を行ないます。もちろんおカネは一切もらいませんし、住むところも斡旋します。研修が終われば、畑や田んぼも紹介する。3.11以降も、1家族と単身者4名で6名の新規就農者が生まれています。私が知っている中で、フクイチから50キロ圏内で3.11以降によそから就農者が多く来た地域はほかにありません。なぜここには来たのかと言えば、きちんと支える体制があるということに尽きると思います。

さらに、その厳しい中で積極的に未来に向けた農業を展開しています。たとえばこの2年間で農家民宿が14軒も生まれました。直接のきっかけは、2011年以降、たくさんの研究者をはじめ支援者たちが東和に来て、放射能測定をしたりアド

バイスをしたりしたわけですが、彼らが泊まるどころが足りない。当初は各農家に泊めていたけれども、考えてみればこれからこういうことも続くし、児童・生徒の農業体験を長年受け入れていた地域でもある。それなら農家民宿をつくって泊まってもらおう、それを農業の兼業の一つにしようと考えて、昨年7軒、去年7軒、14軒のいろいろなタイプの農家民宿が誕生しました。

昨年の秋には「ふくしま農家の夢ワイン株式会社」も設立されています。株主10人で、一人を除いて50代後半から60代です。このワインづくりは3.11以前に始まり、ワインに適したブドウを植えていました。山梨の小規模なワイン会社にみんなで研修に行き、この12月に最初のワインができます。原発事故があっても、夢をあきらめなかったのが、凄いと思います。

また、りんごの産地ですが、2011年の秋から冬はりんごが売れなくて、大量に捨てなければならなかった。それはあまりにもったいない。どうしようか。そうだ、りんごを使ったシールドをつくろうと考えて、昨年産のりんごでことしの4月から製造・販売が始まりました。飲み口がさわやかで、特に女性に好まれるようです。

さらに、麦を栽培していたので、麦焼酎がある。日本酒は二本松市に伝統ある蔵元がある。加えて「ななくさナノブルワリー」という地ビール会社も誕生しました。ナノテクノロジーという言葉聞いたことがあるかもしれませんが、ミリは1000分の1の単位、ナノは10億分の1の単位ですから超ミニということです。大麦に地元のハーブや果物を入れた発泡酒で、350ミリリットル入り550円で販売されています。

このブルワリーをやっているのは移住してきた40前後の夫婦で、旦那さんも奥さんも農林水産省のキャリア官僚でした。旦那さんがたまたま旧東和町役場に出向して、そこで東和の魅力に触れて、戻ってしばらくは本省内で仕事をしていましたが、やはり自分は机の上でなく、東和に行つて有機農業をやりたいと考えて移住し、いまや新規就農者のリーダーの一人です。

東和はもともと児童・生徒を受け入れて教育グリーンツーリズムをやってきました。しかし、空間放射線量が年間1~1.5ミリシーベルトでは、小学生、中学生を受け入れるのは当面は難しい。

でも、ウイスキー以外のさまざまな地酒があるわけですから、グリーンツーリズムの新しい形態としてアルコールツーリズムをやろうという計画がもちあがっています。農山村の応援をしている連中は私を含めてなぜか酒好きが多いので、みんながいまこのアルコールツーリズムの支援に動いています。

農水省は「強い農業 攻めの農業」が大好きですが、それを地産地消でやっていくわけです。ぼくは全ての大規模農業を否定するつもりはありませんけれども、本当に強い農業というのは、国が言うような大規模な農業では決してない。食べてくれる人が目に見える農業のほうが、本来ずっと強い農業だと思います。

こうしたいわばプロの農業の一方で、いわき市では市民団体が中心になって「いわきおてんとSUN プロジェクト」を三つの柱で行っています。一つ目の柱は「新しい産業の創出」で、オーガニックコットンの栽培と製品化です。実は食糧自給率どころではないほど低いのが衣料製品の自給率で、限りなく0%に近い。綿も麻も絹もほとんどつくられていません。その中で綿は塩害に強いそうです。いわき市は雪が少なく、日照時間が多い地域ですが、海岸沿いですから津波でやられたところが結構ある。そこで塩害に強い綿を有機栽培して、Tシャツなどにしていこうということです。二つ目の柱は市民が主役の自然エネルギーの活用で、太陽光発電をメインに、コミュニティ電力事業を始めています。三つ目の柱は、被災地から学び、考えるスタディツアーです。

昨年は1.5ヘクタールで、Tシャツ2200枚と綿の種も使った人形を5000個つくりました。歩みだしたばかりですけれども、ことしの栽培面積は昨年の2倍に増えています。栽培指導をしているのは、残念ながらもう帰れなくなった浪江町から避難してきているプロの農業者。また、小・中学生も校庭の一角で育てています。Tシャツは1枚3000円からで、ちょっと高いですが、復興のシンボルとしてのTシャツです。

「福島県有機農業ネットワーク」の話は、さっき若干しましたので省略します。私自身は編集者として、昨年3月に『放射能に克つ農の営み』を出版しました。そう簡単に勝利はできないと思っているので、勝利の「勝」ではなく克服の

「克」を使いましたが、これは有機ネットの仲間たちとつくった本です。

『原発事故と農の復興』は、ぼくたちが尊敬する原発専門家の小出裕章さんを招いて、有機農業の仲間たちと農業の復興を進めるためにはどうしたらいいか、徹底討論した結果です。

もう一つ言っておかなくてはならないのは、移住を選択した農業者たちもいるということです。これは四つのタイプに分かれています。

1番目は放射線量が高くて移住せざるを得ない農業者です。

2番目は、放射線量はそれほど高くないけれども、移住をいち早く決断し、別の地域で農業を再開した農業者です。二本松市の有機農家で、2011年3月14日、爆発があった時点で「ここではもうやらない」と決断して、3月末から移住地を探し、5月に長野県上田市に移住して、6月からお米や野菜をつくった人がいます。彼はぼくに「変なものはつくりたくない」と言いました。

彼の言葉によると、「たとえ空間放射線量が1ミリシーベルト以下であっても、自分はそれは変なものだと思う。また福島県は不検出と言っているが、うそだ。行政の言うことは信じられない。前向きにこれからの歴史を創っていきたい」ということでした。提携の消費者にも、安全な土地に移住すれば野菜を買い続けると言われたそうです。こういう選択をする消費者もいます。この2番目の人たちは、自分で決断して新しい道を歩み始めた。私がそれに対してどうのこうの言う資格はありませんし、言う必要もないと思います。ただ事実だけを伝えておきます。

3番目は放射線量がある程度高く、移住が残留かでも揺れている農業者。4番目は放射線量が高く、もう戻れないことも分かっているが、営農を再開する気持ちになかなかない農業者。この3番目と4番目の方たちがとても大変です。

川俣町の山木屋地区で長年、山地酪農といって、牛を放牧して、飼料も自分たちで草から育てて自給し、おいしい牛乳をつくってきた人の話も聞きました。普通のホルスタインではなく、ブラウンスイスという、チーズなどの加工に向けた牛も飼っています。ご夫婦に1時間話を聞こうと思って行ったら、だんだん感情がこみあげてきて、「長年積み上げてきたものが一瞬にして奪わ

れて、もう気持ちがなえてしまった」と泣きそうになりながらおっしゃる。

結局3時間以上話を聞きました。こうした農業者が一番つらいと思います。そういう人たちに対して「金銭の補償があるからいいじゃないか」と言う人間もいます。おカネの補償はもちろん必要ですが、おカネには決して換えられないものがある。そのことをきちんと考えていかなければなりません。

ところが、政府は平気で原発を再開し、さらに海外に輸出までしようとしている。「本当に許せない」と、私が話を聞いた福島の農業者たち全員が言いました。農業者たちだけではない。福島県民はなかなか表立って言わない人が多いのですが、皆さんそう思っています。長く話していると、必ず原発再開を批判する言葉が出てきます。

ちなみに福島県は2040年に県で使う全エネルギーを再生可能（自然）エネルギーにするという計画を立てて、少しずつ歩みだしている。ほとんど全ての市町村が再生可能エネルギーを増やしていこうと考えています。果たしてそれが2040年にできるかどうか、いまの段階では何とも言えませんけれども、少なくともいま必要なのは、そういう動きを応援し、原発再開の方向性は間違っていると言い続けることです。

ちなみに、ぼくが仲良くしている農業者たちが

この2~3週間で心の底から怒ったことはオリンピックです。「何なんだ。原発の問題は何も解決していないのに、オリンピックかよ。東京の人間は何を考えているんだ」。ぼくも東京都民ですが、批判されて当然だと思います。決まったからといって、開催をこのまま許してはいけない。そのことも含めて、私たちはどういう復興をしていくべきかを考えなくてはならない。

いままでのような成長優先型の復興ではなくて、脱成長的な、あるいは内発的な復興をつくり出していかなくてはなりません。外部から資本を持ってくるのではなくて、それぞれの地域の内側から、地域にある資源を利用して、新しい仕事を生み出していく。資源というのは第一次産業の資源だけではなく、生活している人も含めて大切な資源です。そして、それは閉ざされたものではなく、外部との交流や知恵を活かしていく。そういう内発的な復興が大事です。農家民宿もアルコールツーリズムもオーガニックコットンも全て、内発的な復興の具現化された姿だと思います。それぞれの地域で、人びとが外とつながり、知恵をしぼって、自然環境を守りながら、豊かな暮らしと本当の幸せを見つけていく。これが一番大事な復興のあり方です。

以上でぼくのお話を終わります。どうもありがとうございました（拍手）。

資料1 福島県の2012年産米検査結果<スクリーニング検査>

| | 測定下限値 未満 (<25) | 25~50 ベクレル/kg | 51~75 ベクレル/kg | 76~100 ベクレル/kg | 計 |
|------|-------------------|------------------|------------------|-------------------|------------|
| 検査点数 | 10,318,779 | 20,251 | 1,383 | 72 | 10,340,485 |
| 割合 | 99.78 % | 0.2 % | 0.01 % | 0.0007 % | 99.99% |

資料2 福島県の2013年産野菜の放射性セシウム検出結果

(単位ベクレル)

| 品目 | 検査点数 | 25未満 (%) | 25~50 (%) | 51~75 (%) | 76~100 (%) |
|------------|-------|-------------|-----------|-----------|------------|
| キュウリ | 2,445 | 2445 (100%) | | | |
| トマト | 1,741 | 1741 (100%) | | | |
| ねぎ | 472 | 472 (100%) | | | |
| じゃがいも | 766 | 766 (100%) | | | |
| ほうれん草 | 430 | 430 (100%) | | | |
| たらの芽(栽培もの) | 13 | 12 (92.3%) | 1 (7.7%) | | |

(注) 3月18日~9月9日.

資料3 福島県の2013年度果物の放射性セシウム検出結果

(単位ベクレル)

| 品目 | 検査点数 | 25未満 (%) | 25~50 (%) | 51~75 (%) | 76~100 (%) |
|--------|-------|-------------|-----------|-----------|------------|
| もも | 8,647 | 8647 (100%) | | | |
| りんご | 439 | 439 (100%) | | | |
| さくらんぼ | 794 | 787 (99.1%) | 7 (0.9%) | | |
| ブルーベリー | 41 | 41 (100%) | | | |

(注) 表4に同じ.

資料 4

消費者はどう考え、どう行動したのか

根強い不信任 政府・行政の発表は信頼できない

一般消費者

福島・宮城・茨城県の2011年度産米についての購買調査（既婚女性，有効回答1760人）によれば，セシウムが暫定基準以下でも買わないという回答が首都圏で5割以上，関西圏で6割以上．セシウム不検出でも買わないという回答も，首都圏で約3割，関西圏で4割．

有機農産物の購入者

提携（生産者と消費者の親密な関係と言われてきた）に熱心な人ほど年配者を含めて，生産者から「さっさと，足早く離れた」

本来であれば，生産者がかもっとも苦しいときに支えるはずの人たちは，実は自分と家族安全な食生活しか考えていなかった

農の現場との断絶，想像力の欠如

農産物の安全性は放射性物質のみで判断できないという当たり前の事実を忘れがち

資料 5

3.11 以後，数カ月の動き

3月15日～ 避難者の受け入れ

3月25日 耕耘と作付け延期の指示

4月14日 生産者会議

4月19日 福島県有機農業推進室有機物の施用など「作付けに関する考え方」発表

4月下旬 「耕して種を播こう．出荷制限されたら損害賠償を提起しよう」

5月上旬 日本有機農業学会有志の視察，以後復興支援

6月 取引先の支援を受け，測定開始．農地の汚染マップを作成

7月～ 徹底した測定活動の開始

暮らし，心の再建に向けた座談会（想いや体験を語り合う）